

## 日高真実伝（四）

—（東京）帝国大学最初の教育学教授—

The Biography of Mazane Hidaka (IV)

平 田 宗 史

Munefumi HIRATA

第四部 学校教育講座

（2001年8月21日 受理）

### 第5章 帰国後の日高真実の活動と友人達

#### 第1節 帰国後の日高真実の活動

約3年半のドイツ留学を終えて，日高真実は，1892（明治25）年2月28日，横浜港に到着する。

真実がドイツに留学していた約3年半余の間，日本は，どのように変化していたか。その大きな変化の一つは，「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」（第一条）という天皇が強大な権限を有する『大日本帝国憲法』が，1889年（明治22）年2月11日，發布された。これによって，天皇制国家体制が確立された。衆議院と貴族院の2院制の帝国議会が開設されたが，2院は全く対等の権限もっていたため，国民の意思を反映する衆議院の発言権は半分しかなかった。しかも，衆議員の有権者は，満25才以上の男子で国税15円以上の納入者に限られており，全国民の約1.1パーセントに過ぎなかった。1890（明治23）年5月17日には，『府県制・郡制』が公布され，戦前の地方自治制度が確立するのである。

教育の分野では，内閣制が発足し，初代文部大臣に就任し，積極的に教育改革を進めていた森有礼が，大日本帝国憲法発布祝賀式典が行なわれる当日，刺され，翌日亡くなる。翌年の10月7日は，小学校令が改正され，小学校について詳細な規定がなされる。そして，同月30日，戦前の教育の基本理念となる『教育勅語』が公布されたのである。

まさに，新しい日本国が，着々と，進展しようとしていた。その頃に帰国した日高真実は，帰国翌月の1892（明治25）年3月16日，「高等師範学校教授兼文科大学教授」に任命されたのであった。ここで注目すべきことは，「兼」という文字である<sup>1)</sup>。素直に考えると，高等師範学校教授が専任で，文科大学教授は兼任ということになる。しかし，『帝国大学一覧』（従明治25年至明治26年）

によると，文科大学の教授の欄に，日高真実の名がある。しかし，日高真実は，「高等師範学校教授トシテ<sup>2)</sup> 五級俸（但当分千円支給）文科大学教授トシテ四百円支給セラ」れたのであった。給料額からみると，高等師範学校教授<sup>3)</sup>としての俸給が多い。一週間の「教育学」の担当時間も，高等師範学校の方が多いのである。

『師範学校令』によると，高等師範学校は，東京に一校設置されることになっていて，『高等師範学校学科及其程度ノ事』（明治19年10月14日 文部省令第17号）によると，その学科は，男子師範学科と女子師範学科に分かれていた。そして，男子師範学科は，理科学科，博物学科および文学科に分かれていた。修業年限は3ヵ年で，文学科の時間配当は，表（V-①）の通りである。教科の中で配当時間の多いのは，教育学・倫理学の時間である。第1学年，4時間，第2学年，3時間，第3学年，13時間である。この配当時間は，理化学科，博物学科とも，同じである。その内容は，教育汎論，教授汎論，教授各論，教育史，批評及実地練習，人倫道德ノ要旨等々である。

女子師範学科は独立して，1890（明治23年）年3月25日，女子高等師範学校となる。

1892年（明治25）年7月には，高等師範学校の学則は，大幅に改正される。学科は，文学科，理化学科，博物学科の三学科に分けるのは変わらないけれども，文学科を，国語および漢文を主とする甲科と外国語を主とする乙科の二科に分けたことは，以前と異なる。また，各科の修業年限を3ケ年から4ケ年に延長したことも，重要な改正である。勿論，学科目および毎週教授時数も，大幅に改正された。それは，表（V-②）の通りである。

大幅な改正の要点は，表表（V-②）の注で記した通りである。

表 (V-①) 高等師範学校文学科の授業時間配当表

(明治19年10月14日制定)

體音	哲	理	歴地	英	漢國	倫教	文 學 科
操樂	學	財 學	史理	語	文語	理育 學學	
六	二		六	六	六	四	第一學年
六	四	三	五	五	四	三	第二學年
六	四			三	四	一三	第三學年

注 文部省『師範教育関係法令』昭和13年3月 81頁。

兼職となっている帝国大学教授の場合を検討してみよう。1892(明治25)年12月24日出版の『帝国大学一覽』(従明治25年至明治26年)によると、文科大学の教授の一員として、「教育学 文学士 日高眞實 宮崎」とある。これから見ると、帝国大学文学大学の専任教授である。文科大学は、哲学科、国文学科、漢学科、国史科、史学科、博言学科、英文学科、独逸文学科、佛蘭西文学科の九つの学科からなる。真実の出身学科の哲学科の学科課程は、つぎの通りである。

## 「哲学科

## 第一年

哲学概論(第一期)	}	第一期 毎週四時
西洋哲学史(第二,三期)		第二,三期毎週五時
史学		一年間 毎週三時
国語		一年間 毎週一時
漢文		一年間 毎週三時
理学(動物学若クハ地質学)		一年間 毎週三時
英語		一年間 毎週三時

独逸語	一年間 毎週三時
羅甸語	一年間 毎週三時

## 第二年

西洋哲学史	一年間 毎週三時
論理学及知識論	第二,三期 毎週三時
史学	一年間 毎週三時
社会学	一年間 毎週三時
比較宗教及東洋哲学	一年間 毎週二時
支那哲学	一年間 毎週一時
印度哲学	一年間 毎週二時
生理学	一年間 毎週三時
心理学	一年間 毎週三時
倫理学	第二,三期 毎週三時
国文学	第一期 毎週二時
独逸語	一年間 毎週三時
羅甸語(随意)	一年間 毎週三時

## 第三年

美学及美術史	一年間 毎週二時
教育学	一年間 毎週二時
哲学	一年間 毎週二時
比較宗教及東洋哲学	一年間 毎週二時
支那哲学	一年間 毎週二時
印度哲学	一年間 毎週二時
精神病論	一年間 毎週二時
哲学実習	一年間 毎週三時
独逸語	一年間 毎週三時
倫理学×	一年間 毎週三時
心理学(精神物理)×	一年間 毎週三時
社会学×	一年間 毎週二時
希臘語×	一年間 毎週三時

×印ノ四課目中一課目ヲ撰修セシム<sup>4)</sup>

教育学は、第三学年で、毎週2時間、講義が行なわれている。哲学科以外の8科目も、そうである。したがって、文科大学では、9学科の学生全員が、合同で、教育学の講義を受けたのであろう。

高等師範学校の教育学担当の時間数と比べると、帝国大学での教育学担当時間数は、かなり少ない。このことから、「高等師範学校教授兼文科大学教授」と称せられ、給料も、高等師範学校教授として、千円、文科大学教授として、四百円、支給されたのである。<sup>3)</sup>

高等師範学校および文科大学で講義された教育学の内容は、今のところ分らない。しかし、それは、帰国、約1年前に出版された『日本教育論』および、帰国直後に出版された『教育に関する攻究』に基づいたものであったものであることは推察出来る。それについての検討は、次章で行なう

[illegible]

昭和6年10月30日 41～44頁による。

ことにする。

真実の職務は、高等師範学校および文科大学で、教育学を講義し、指導するだけではなかった。文部省の専門委員の仕事もあった。

1892（明治25）年12月19日、明治26年の尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校の教員検定試験の試験委員に任命されている。それは、文科大学学長である外山正一をはじめ、46名で、当時、各教科の最高峰と言われる人々であった。この場合、真実の肩書きは、高等師範学校教授である。<sup>5)</sup>

翌1893（明治26）年2月2日には、中学校学則取調委員に任命される。委員は、6名であるが、委員長には、文部省専門学務局長である浜尾新が任命され、委員には、菊池大麓（理科大学長 理学博士）、高嶺秀夫（高等師範学校長）、木下広次（第一高等中学校長 法学博士）、嘉納治五郎（文部省参事官）、日高真実（文科大学教授）が命ぜられた。ここで注目すべきは、真実の肩書きが、文科大学教授となっていることである。<sup>6)</sup>

それはさて置き、同年3月7日、河野敏鎌から井上毅に、文部大臣が変わると、この委員会は、活発に活動し、中学校制度改正において重要な意味を持つようになる。中学校学則取調委員を助けるために、4月中旬中学制度取調掛が置かれる。これが置かれると同時に、集中的に審議され、その意見書が井上文相に提出され、委員は、5月21日に任を解かれる。意見書の骨子は、つぎのようであると言われている。学科課程において、学術性を重視すると同時に、実用性をも重視することとし、また、小学校から大学までの連絡をスムーズにし、大学卒業までの年限を短縮することである。<sup>7)</sup> 真実が、この委員会で、どのような役割を果たしたかは分らないが、彼は、彼なりに、中等教育に関して意見を持っていたのは言うまでもない。それについては、次章で考察する通りである。

真実は、「夜は十二時を過ぎざれば寝ねず、朝は必東天の白む頃に起き出て、孜々其職務を果すことを力め、其極右の病を得、病辱にあること殆んど二年」<sup>8)</sup>とあるごとく、彼は、非常なる努力家で、それが一因となって、肺を患い、中学学則取調委員に任命された頃には病は進み、1893（明治26）年9月9日、帝国大学教授を依願免官となる。翌年5月28日には、高等師範学校教授を非職となる。同年8月20日には、帰らぬ人となった。

## 注

- 1) 東京帝国大学 『東京帝国大学五十年史』（上）昭和7年11月20日 1320～1321頁。
- 2) 帝国大学 『帝国大学一覽』（従明治25年至明治26年）明治25年12月24日 167頁。
- 3) 『高鍋郷友会報告』第18号 明治28年3月23頁。
- 4) 前掲書 『帝国大学一覽』（従明治25年至明治26年）170～173頁。
- 5) 『大日本教育会雑誌』第123号 明治25年12月25日 770～771頁。
- 6) 『教育時論』第282号 明治26年2月15 29頁。
- 7) 海後宗臣編 『井上毅の教育政策』東京大学出版会 1968年2月25日 222～224頁。
- 8) 『教育時論』第338号 明治27年9月5日 28頁。

## 第2節 友人達

ここに一枚の写真がある。これは、1887（明治20）年9月撮影の写真である。<sup>1)</sup> 向って右から徳永（のち清沢）満之、上田萬年、日高真実、岡田良平、沢柳政太郎である。それぞれ、『大人名辞典』（平凡社）に名を連ねている。日高真実が、中央にでんと坐っている。これは、彼が一番年上であるからではない。一番年上は、徳永であり、岡田、日高、沢柳、上田と、つづく。5人は、同じ文科大学出身であるけれども、卒業年月は、日高（明治19年7月）、徳永、岡田（明治20年7月）、沢柳、上田（明治21年7月）である。服装からみると、日高だけが和服で、あとの4人は、洋服である。4人のうち2人、沢柳と上田は、学生であるので学生服姿である。徳永と岡田は、卒業間もないのか、スーツ姿である。そして、日高は、当時帝国大学大学院生であり、嘱託として文科大学の英語講師に就任していた。

それは、さて置き、4人の経歴をみてみよう。

- (イ) 徳永満之〔1863（文久3）年～1903（明治36）年6月6日〕

名古屋に生まれ、東京大学予備門を経て、1887（明治20）年7月9日、帝国大学文科大学哲学科を卒業。その後、大学院に入って宗教哲学を専攻。かたわら、第一高等中学校および哲学館にて教鞭をとる。翌1888（明治21）年、真宗大谷派の中学校長に就任する一方、高倉大学寮にて宗教哲学を教える。11年後の1899（明治32）年、大谷派の新法主光演が上京することになり、

写真（Ⅴ－①） 日高真実と友人たち（明治20年9月）



徳永満之

上田萬年

日高真実

岡田良平

沢柳政太郎

彼は補導のため、東京に移住することとなった。同時に、東京に移転した真宗大学の学監となる。一方、寓居に、「浩々洞」の名をつけて学生を指導監督したり、日曜講話をしたり、雑誌『精神界』を発刊し、「精神主義」を鼓吹した。彼の著書および彼に関する著書は、多数あり、明治の宗教（仏教）界を代表する一人となった。惜しくも、1903年40才の若さで亡くなる。<sup>2)</sup>

- (ロ) 上田萬年〔1867年2月11日(2) (慶応3年1月7日)～1937(昭和12)年10月26日〕

江戸（東京）に生まる。東京大学予備門で学んだ後、東京大学に入学、1888（明治21）年7月10日、帝国大学文科大学文科を卒業。直ちに、大学院に進学、間もなく、日高真実講師のあとをうけて、萬年は、文科大学の英語学授業嘱託講師となる。1890（明治23）年9月、ドイツに留学、さらに、フランスへ留学、そして、1892（明治27）年6月、帰国、翌月、帝国大学文科大学の教授に任命される。その後、国語学の発展に寄与する。1898（明治31）年11月、文部省専門学務局長兼文部省参与官に任ぜられるけれども、東京帝国大学教授をも兼務していた。1902（明治35）年3月、学務局長を辞め、文科大学教授専任となる。1912（明治45）年3月には、東京帝国大学文科大学学長に就任する。その間、国語調査委員会の委員をしたり、著作活動をしたり、多忙であった。1926（大正15）年12月、貴族院議員となる。翌年3月、東京帝国大学を停年となる。同時に、国学院大学学長に就任。2年後には、それを辞め、その後、臨時ローマ字調査委員、神社制度調査会委員等をして晩年を過し、1937（昭和12）年10月26日、亡くなる。<sup>3)</sup>

- (ハ) 岡田良平〔1864年6月7日（元治元年9月17日）～1934（昭和9）年3月23日〕

岡田良平は、遠江掛川藩（静岡県）の藩士良一郎の長男として生まれる。幼い時から、四書五経の教育を受け、良平は、1879（明治12）年、上京し、2月東京府立第一中学校に入学し、6ヶ月の勉強の結果、同年9月、東京大学予備門に合格する。3年後の1883（明治16）年6月予備門を修了。東京大学文学部に進学、哲学を学び、1887（明治20）年7月9日、帝国大学文科大学哲学科を卒業する。直ちに、大学院に進むと同時に、第一高等中学校で、歴史科を嘱託として教えることになる。1890（明治23）年10月、第一高等中学校教授となり、その後、文部省視学官（明治26年2月）、参事官、山口高等中学校

長（明治27年1月）、参事官（明治29年3月）、実業学務局長（明治33年）を経て、文部次官沢柳政太郎の懇請により、1907（明治40）年10月、京都帝国大学総長となる。翌年7月には、文部次官、そして、1916（大正5）年10月9日、文部大臣に就任（1918年9月29日まで）、再び、1924（大正13）年6月11日、文部大臣となる（1927年4月20日まで）。彼の大学卒業後の経歴は、文部行政にかかわるものであり、1934（昭和9）年3月23日、70才で亡くなる。3才下の弟も、文部大臣となったのであった。<sup>4)</sup>

- (ニ) 沢柳政太郎〔1865年5月17日（慶応元年4月23日）～1927（昭和9）年3月21日〕

信州松本に生まれる。1873（明治6）年、父の仕事で、山梨県甲府に移り、小学校である徽典館に入学。翌年2月、松本に帰へり、4月、開智学校に編入。父の転勤により、1875（明治8）年9月、上京、11月1日、東京師範学校附属小学校に編入。勉学は順調に進み、1880（明治13）年9月、東京大学予備門に入学、4年後の1884（明治17）年9月、東京大学文学部哲学科に進学する。1888（明治21）年7月10日、帝国大学文科大学哲学科を卒業。7月14日、文部省総務局に雇われる。かたわら、東京専門学校、哲学館の講師となり、「心理学」、「社会学」、「倫理学」を教えた。1890年8月には、文部省書記官となり、翌年2月、結婚、8月、文部大臣秘書官兼文部省書記官となる<sup>5)</sup>。1892（明治25）年11月2日、「修身教科兼機密漏洩事件」にまき込まれ、辞職。翌年9月16日、先輩の徳永満之の懇請により、京都大谷尋常中学校長となるが、1年後には、辞め、その後、群馬県尋常中学校校長、第二高等学校長、第一高等学校校長等を経て、1898（明治31）年11月24日、文部省普通学務局長となる。樺山資紀文部大臣の下で、教育制度の改革に取り組む。1906（明治39）年7月18日、文部次官となる。2ヵ年の在任中、義務教育年限を4ヵ年から6ヵ年に延長したり、高等教育機関の増設等に尽力する。

1908（明治41）年7月21日、文部次官を依願免官となるが、著作活動に集中する一方、貴族院議員（勅選）、高等教育会議議員に選ばれる。

1911（明治44）年3月14日、東北帝国大学初代総長に就任、2年後の1913（大正2）年5月9日、京都帝国大学総長に任命される。「京大沢柳事件」を引き越し、翌年4月28日、京都帝国大学総長を辞任する。同年7月18日には、文学博士の学位を授与されるが、その後、民間人

として、日本の教育の発展に尽すことになる。1916（大正5）年2月1日、帝国教育会会長に就任、同年9月22日、私立成城中学校長となり、翌年4月1日には、新教育運動の中心となる私立成城小学校を創設し、その校長となる。一方では、臨時教育会議委員、教育評議会委員、臨時教育行政調査会委員等をしたたり、他方では、欧米教育視察をしたりして、国際交流に尽力し、1927（昭和2）年12月24日、死去。<sup>6)</sup>

以上、写真と一緒に写った4人の活動と業績を略述して来た訳であるが、徳永は宗教界で、上田は、国語研究および、文部行政で、岡田は、最後は文部大臣を勤めるという文部行政で、沢柳は、文部行政と教育学研究と民間教育等で活躍し、わが国のリーダーとなり、それぞれの分野で、わが国の発展に寄与したのである。これらを見てみると、真実が、もう少し、長生きしていたらなと、思うことがある。真実の友人は、前述の4人だけでないことは言うまでもない。<sup>7)</sup>

#### 注

- 1) 澤柳禮次郎著『吾父澤柳政太郎』 富山房 昭和12年10月30日 30～31頁。
- 2) (イ) 吉田久一著『清沢満之』 吉川弘文館 昭和36年6月5日  
(ロ) 「清沢満之」(下中彌三郎編『大人名事典』(第2巻) 平凡社 昭和28年11月28日 342頁)
- 3) (イ) 「上田萬年」(昭和女子大学近代文学研究室著『近代文学研究叢書』(42巻) 昭和女子大学近代文化研究所 昭和50年11月30日 255～294頁  
(ロ) 「上田萬年」(下中彌三郎編『大人名事典』(第1巻) 平凡社 昭和28年9月30日 347～348頁)  
(イ)と(ロ)では、生年月日と名前の読み方が異なる。生年月日は、(イ)では、慶応3年1月7日とあるが、(ロ)では、同年1月1日とある。名前の読み方は、(イ)では、「うえだかずとし」、(ロ)では、「うえだまんねん」と、称している。
- 4) (イ) 下村寿一著『岡田良平』(日本教育先哲叢書 第22巻) 文教書院 昭和19年1月20日  
(ロ) 前掲書『大人名事典』(第1巻) 347～348頁。
- 5) 沢柳政太郎は、鹿児島県知事、初代八幡製鉄長官となった山内提雲(1838年10月(天保9年9月)～)の長女「はつ」と、1891(明治24)年2月24日、結婚。日高真実、その妹「ゆき」(雪子)と翌年の10月、結婚する。『在東京高鍋郷友会報告』(第17号 明治25年12月 18頁)によると、「◎日高文学士ノ婚儀 郷友文学士ヒダカ真実君ハ今般前鹿児島縣知事山内提雲氏ノ令嬢ユキ子ト結婚セラレタリ」とある。すなわち、真実と沢柳は、帝国大学文科大学の先輩後輩であるとともに、義兄弟である。
- 6) (イ) 澤柳政太郎著『澤柳政太郎全集 第10巻』 国土社 1980年3月31日 511～516頁  
(ロ) 「澤柳政太郎」(下中彌三郎編『大人名事典』(第3巻) 平凡社 昭和28年12月23日 186～187頁)
- 7) 1886(明治19)年7月、帝国大学文科大学選科を卒業した松本源太郎(1859～1925)も、その一人である。彼は、真実が亡くなったとき、略伝を書いた人物である。卒業後、第一高等中学校教授、高等師範学校教授、第五高等学校教授、山口高等学校教授等を歴任し、のち宮中顧問官となる。(下中彌三郎編『大人名事典』(第6巻) 平凡社昭和29年6月15日 81頁)。